

ハインリヒ・リッター・フォン・スルビクと 「全ドイツ史観」

今 野 元

0. 研究企画「ドイツにおけるナショナリズム研究」

現代のナショナリズム研究には3つの問題がある。(一)ナショナリズム研究が反ナショナリズムの政治運動と混同されているという問題。ナショナリズム礼讃のための研究も、ナショナリズム排除のための研究も、予め下された価値判断を「学問」の名で権威付けている点で、同じ知的水準にある。(二)ナショナリズム批判が不公平になされているという問題。ドイツのナショナリズムはいつも「ナチズム」を投影して否定的に描かれるが、チェスコ、ポーランド、ユダヤのナショナリズムには同程度の批判が見られない。英仏のナショナリズムは「主観的」などとして模範視されるが、ロシア・ナショナリズムは少数民族抑圧の代名詞として描かれている。初めに結論ありきの印象論である。(三)ナショナリズム研究でも「英語帝国主義」¹⁾が顕著だという問題。日本では、戦前政治学＝ドイツ国家学＝法学的・官憲国家的教説から戦後政治学＝英米社会科学＝科学的・民主的分析へという進歩史観が、ドイツ学への否定的先入観を醸成してきた²⁾。英米文化を国際標準とし、戦後ドイツ文化の脱ドイツ化＝英米化を進歩とする日本の西独派ドイツ研究者も、そうした先入観に同調している。

「ドイツにおけるナショナリズム研究」は、かかる研究動向に一石を投じる企画である。本研究企画では、ドイツ語圏のナショナリズム研究者を選出し、その学説を紹介して、それにどのような意義があるかを検討する。またその人物がナショナリズム研究を生み出すに到った経緯について叙述する。これはかつて叢書『ドイツの歴史家たち』³⁾が行ったことを、ナショナリズム研究に焦点を絞り、その執筆者世代をも視野に入れてやり直すものである。こうした作業により、本研究企画は「輸入学問」、「政治学学」、「歴史学学」とは一線を画し、ドイツ学問思想史の試みともなるのである。

1. ハインリヒ・リッター・フォン・スルビクの生涯と業績

本論はこの研究企画の第6作として、ヴィーン大学教授などを務めたハインリヒ・リッター・フォン・スルビク(1878年-1951年)を取り上げる。大ドイツ主義者スルビクは、「全ドイツ史観」を提唱したことで知られる。小ドイツ主義が当然視されてきた日本では、19世紀のユリウス・フィッシャー、20世紀前半のスルビク、20世紀後半のアダム・ヴァントルシュカが継承し、1989年にカール・ディートリヒ・エルトマンが再評価した大ドイツ主義史学⁴⁾への興味が乏しく、幾つかの例外を除いて、それが等閑視されてきたので⁵⁾、本論はその点での転換を目指している。

H・R・v・スルビクは1878年11月10日、ヴィーンのカトリック系官吏の家庭に生まれた。スルビク家は元来ベーメンの農民だったが、侍従職に勤務した祖父フランツ・スルビクが「リッター」(騎士: エステルライヒでは男爵の下で、最下級の「エドラー」(貴人)の上の爵位)号を得、父フランツ・リッター・フォン・スルビクは財務省に勤務し、宮廷顧問官となった。後述のようにスルビクは、生家が元来チェスコ人だったことを認めているが、同家はこうした勤務の過程で「ドイツ人」意識を育んでいったと主張する。スルビクの青年時代はバデニ言語令による混乱が増大した時期で、更に1901年から一年志願兵として多民族軍隊での兵役を済ませており、それらがスルビクのハプスブルク家への忠誠心及び「ドイツ人」意識を強めたと考えられている。ハプスブルク家官吏の矜持を継承したスルビクは、1919年4月3日の「貴族廃止法」でエステルライヒ貴族の称号が全廃され、戸籍上「ハインリヒ・スルビク」とされた後も、生涯「ハインリヒ・リッター・フォン・スルビク」を名乗り続け、今日でも一般にそう呼ばれている。また母ヴァルプルガの父ヴィルヘルム・ハインリヒ・グラウエルトは、ニーブールに師事し、「新絶対主義」期にヴェストファーレンのミュンスター・アカデミーから文部大臣レオポルト・フォン・トゥーン・ウント・ホーエンシュタイン伯爵に招聘されたヴィーン大学歴史学教授で、この祖父からスルビクは全ドイツ的視野と歴史学への興味とを引き継いだ。双子の兄弟ロベルト(参謀大佐・氷河研究者)と名門校テレジアヌムに通学したハインリヒは、教師オイゲン・グリアの影響下で歴史学を志し、1897年秋からヴィーン大学で歴史学、エジプト学、ドイツ学、地理学を受講した。1898年秋から1年間、スルビクはトゥーン=ホーエン

シュタイン文相が設立した「帝立・王立エステルライヒ歴史学研究所」(K. K. Institut für Österreichische Geschichtsforschung)で準備講座を受講し、好成績を上げて研究所第23部正会員に採用された(1899年-1901年)。この研究所で、スルビクはアルフォンス・ドーブシュから刺戟を得て、処女論文「中世エステルライヒにおける国家と教会との関係」を刊行している。この論文は、原題を「領邦教会形成を目指すエステルライヒ公の努力」といい、教皇の普遍的支配に対抗するエステルライヒ領邦教会の形成を肯定的に描いている⁶⁾。研究所でエンゲルベルト・ミュールバッハー、オスヴァルト・レートリヒ、アルフォンス・ドーブシュに学んだスルビクは、1902年にレートリヒ教授の下で「ニュルンベルク城伯フリードリヒ」に関する博士論文を執筆して博士号を取得した。なお学生時代、スルビクはブルシェンシャフト・ゴティアに加入したが、44年後の1942年になって、シェーネラー外交論を批判したスルビクの記事をゴティアが問題視したことから脱退した⁷⁾。

H・R・v・スルビクは博士号取得後、歴史学者として歩み出した。スルビクは1902年から「エステルライヒ近世史委員会」研究員となり、奥蘭間諸条約の編纂に取り組んだ。1907年、スルビクは論文「レオポルト一世からマリア・テレジアまでのエステルライヒの国家的輸出貿易」で教授資格を取得し、1910年に論文「ヴィルヘルム・フォン・シュレーダー——国家学の歴史に関する一研究」で教授資格をエステルライヒ史から一般史へと拡大した。1912年9月14日、スルビクはユリウス・フィッカー門下の法制史学者アントン・ニッスルの娘ヨハンナとブリクセンで結婚し、10月1日グラーツ大学一般史員外教授に就任した。スルビクはこのシュタイエルマルク公領の首都で、チェルノヴィツ大学から来た歴史家ヨハン・ロゼルト、息子エルンストがスルビクの一番弟子となったドイツ学者ベルンハルト・ゾイフェルトに出会い、長く交流した。1914年6月、スルビクはアルトゥール・ザルツのベーメン工業史論を巡るマックス・ヴェーバーとパウル・ザンダー(プラーク大学)との論争に言及している。スルビクは、ザンダーのザルツ批判にも公正でないところがあるが、ヴェーバーのザンダー批判は「最も粗野で最も度を越した」もので、「忌まわしい」、「社交文化が欠如している場合に典型的」だとしている⁸⁾。

第一次世界戦争が勃発すると、H・R・v・スルビクは民族的興奮に駆られつつ研究を続行した。グラーツ大学は1912/13年のバルカン戦争以来、

教授たちに職場を離れられないと宣言させ、その動員を阻止しようとしていた。だがスルビクは1914年8月26日に書いている。「学術の仕事についてはいま考えることが出来ません。落ち着かないし、ドイツ民族が帝国及び我々のところ〔ハプスブルク帝国〕で、全世界を敵に回して大きな闘争を続けているというのに、私が離れているということが心苦しくてなりません。自分が自由な身ではないということに、私は初めて苦悩しています。」スルビクは1915年5月23日にイタリアが参戦すると我慢できなくなり、正教授昇任前の重要な時期ではあったが、1915年から1918年の夏休みのみ、登山の経験を生かしてアルプス戦線で陸軍大尉(砲兵)としてティロール防衛に当たり、勲章も獲得した。1917年4月1日、スルビクはグラーツ大学近世史・経済史正教授へと昇任し、同年には「エステルライヒ塩山史に関する研究」を発表している⁹⁾。

ハプスブルク帝国の崩壊はH・R・v・スルビクにとって痛恨事であり、歴史観の転機でもあった。1918年10月30日、スルビクはウィーンの帝立学術アカデミー院長となっていた恩師レートリヒに書いている。「我々の恐ろしい崩壊については、何も言わないままで居させて下さい。私は再び軍服を着て、私の微力をもって更に戦うことを許されるのを望むだけです——しかし外部の敵に対してではなく、内なるエステルライヒの破壊者及び我が民族のスラヴ系憎悪者に対してです。」「国家は過去のものになりました——我々に残ったのはドイツ人及びドイツだけです！」つまり「ドイツ人」スルビクは、敗戦以上に帝国内スラヴ諸民族の離反に憤り、帝国崩壊でエステルライヒ愛国主義よりドイツ・ナショナリズムに重心を移したのである。同年11月24日、スルビクはこう慨嘆した。「国家が崩壊し、帝冠が失墜し、民族が史上この上ない苦難にあるいま、恐らく学問的なことを話すときではないでしょう。」彼は「我が国のユダヤ系社会民主主義者について人々が罵っている」のは理解できるとし、革命政権を「「自由な」国家」と括弧を付けて揶揄し、労兵評議會を「現代のベスト」と呼び、自分はいま身体こそ健康だが心は病んでいと嘆き、失望を隠さなかった。「私は、今日は何より床に入りたいです。眠って、眠って、新たにドイツの日が始まるまで寝たいです。」ただスルビクは、カール・ザイツ、カール・レンナーの方がクルト・アイスナー、カール・リープクネヒト、フーゴー・ハーゼよりは百倍ましだと述べている。スルビクは危機打開策として、エステルライヒの「ドイツへの併合」を切望していた¹⁰⁾。

ドイツ・ナショナリズムに燃えたスルビクは、自分のチェスコ系家名の「表記法」を変更しようと試みた。1919年のスルビクの理解によると、母方のグラウエルト家は「ヴェストファーレン出身で生粋のドイツ人」だが、問題は父方である。祖父フランツ・(のちリッター・フォン・)スルビクは、南ベーメンのフラウエンベルクで生まれ、両親はチェスコ人だったが、小学校から「純ドイツ系」学校に通い、17歳でヴィーンに行って1897年に90歳で死去するまで留まり、侍従職で宮廷顧問官となった。彼は文化的には全くドイツ的で、政治的には骨の髄までエステルライヒ愛国者で、チェスコ人の文化的発展を警戒し、ドイツ系新聞のみを購読し、「ドイツ系ベーメン人女性」と結婚し、子供をドイツ人として育てたという。1910年に歿した父フランツもドイツ愛国者で、チェスコ化政策を批判したためにチェスコ系新聞からバッシングを受けたという。そして自分も母から大ドイツ主義を受け継ぎ、テレジアヌムの生徒時代に「断固たる国民的信条」が確立し、学生組合時代以来不変だという。そしてスルビクは、自分の名前が発音困難なことに苦情を述べた。スラヴ系の名前であることが問題なのではなく、周囲にしばしば誤解されるのに傷付いてきたのだという。ただ1921年のマイネッケ宛書簡では、スルビクは自分が「スラヴ系の名前を帯びたドイツ人」であることがドイツ・ライヒで評価を得るのに障害になっているとも述べている。そこでスルビクは、「スルビク」を「セルビク」(Serbik)に変更することを考えた。誇りをもって「スルビク」と名乗ってきた祖父や父も、「多言語的(他国民的?)エステルライヒ」から「ドイツ系エステルライヒ」に移行する事態に鑑みれば、納得してくれるだろうと考えた。だが結局スルビクは、このとき本当に家名を変更することはなかったようである(戸籍役場から変更届を受理されなかった可能性もある)。ドイツ人であることを誇りとするスルビクにとって、スラヴ系の家名は劣等感の種であり続けた¹¹⁾。

スルビクはチェスコ人のみならずユダヤ人にも反撥していた。前述のように、スルビクはユダヤ系革命家への違和感を共有していた。1921年には、スルビクはロートシルト家など「銀行ユダヤ人」(Bankjuden)の財力ゆえに、ユダヤ人が優勢になってきたことに苛立っている¹²⁾。

敗戦の混乱を背景にH・R・v・スルビクは「全ドイツ史観」を形成していく。それまでのスルビクは、エステルライヒという一領邦の専門家という色彩が強かった。また博士論文は政教関係、教授資格論文は経済史であっ

た。だが敗戦後から、スルビクはドイツの指導的領邦としてのエステルライヒに着目するようになり、政治史、伝記研究の手法を磨いていく。この転換の背景に、ドイツ系エステルライヒのヴァイマル共和国との合邦の断念、故郷ベームンにおけるドイツ人とチェスコ人との対立、スラヴ系家名への劣等感があることは想像に難くない。またヴァイマル共和国の歴史家たちとの交流も、彼の歴史研究に刺激を与えたことが書簡からは窺い知れる。『ヴァレンシュタインの終焉』(1920年)で名を挙げたスルビクは、ハイデルベルク大学教授エーリヒ・マルクスの誘いで、マルクス及びカール・アレクサンダー・フォン・ミュラー(ミュンヘン)が編集する論文集『政治の達人』(1922/23年)でメッテルニヒを担当することになり、1925年には単行本『メッテルニヒ——政治家及び人間』を刊行した。これが出世作となったスルビクは、マルクスの女婿ヴィリー・アンドレアス(ベルリン大学、のちハイデルベルク大学教授)、フリードリヒ・マイネッケ(ベルリン大学)などとの交流を深めた。スルビクのマイネッケ宛書簡には、従来ライヒから評価を得られなかったエステルライヒ人として、ドイツ史におけるエステルライヒの役割を主張したいという欲求が垣間見える。マルクスやマイネッケはスルビクの大ドイツ主義に理解を示し、スルビクはアンドレアスの帝国建設記念日講演「大ドイツ主義理念の変遷」(1924年1月18日ハイデルベルク大学)を歓迎した¹³⁾。

ナポレオン伝で有名なヴィーン大学近世史教授アウグスト・フルニエが死去すると、H・R・v・スルビクは1922年にその後任に就任した。メッテルニヒの伝記研究も、ヴィーンの豊富な史料を得て初めて可能になったもので、グラーツに居続けたのでは困難だっただろう。ヴィーンにきたスルビクは、ルートヴィヒ・ビッター、アルフレート・フランツィス・プリブラム、ハンス・ユーベルスベルガーと共に史料集『1914年のボスニア危機から戦争勃発までのエステルライヒ＝ハンガリーの対外政策』を編纂し、「戦争責任」問題に取り組んだ。のちスルビクはケルン大学、ボン大学、ミュンヘン大学、ベルリン大学などライヒ・ドイツ各地の大学からの招聘を受けたが、これを断ってヴィーンに留まった。1934年にスルビクはこの件について、自分の招聘辞退は愚かだったかもしれないが、自分は頂点を過ぎた学者人生をエステルライヒで終えなければならないのだと述べている。ベルリン招聘の拒否は1935年のことである。この間スルビクは1929/30年に第3次ヨハン・ショーバー内閣(ショーバーはイグナッツ・

ザイベルと並ぶキリスト教社会党の指導者)の文部大臣を務めたが、一年で大学に戻った。1934年から1938年まで刊行された5巻本の『エステルライヒのドイツ政策に関する史料集』は、本来はドイツ帝国理念の担い手であったエステルライヒの、ドイツ連邦議長国としての最後の活動(1859年-1866年)を回顧する試みであり、小ドイツ主義史学への対案であった¹⁴⁾。

H・R・v・スルビクは「全ドイツ史観」(1929年ザルツブルク講演)や「ドイツ史におけるエステルライヒ」(1935・36年ベルリン大学講演)で、自分の学問的立場を明確にした。スルビクはその特徴を、次のように説明している。(1)学問的であると同時に国民政治的であること、(2)国民主義的(国民国家的)であると同時に普遍主義的(中欧的、欧州の、帝國的)であること、(3)一面的な小ドイツ主義(プロイセン至上主義)でも一面的な大ドイツ主義(エステルライヒ至上主義)でもないこと、(4)エステルライヒのドイツのための戦いを見据えるものであること、(5)プロイセンのフリードリヒ大王やランケ、部分的にはドロイゼンやトライチュケにも敬意を払うものであること、(6)ドイツ諸国の歴史ではなく、ドイツ「民族=民衆史」(Volksgeschichte)であること、等々。要するにスルビクの「全ドイツ史観」は折衷的性格を有しているが、やはりエステルライヒに軸足を置いた、ドイツ系エステルライヒを含むドイツ史であるという点で、大ドイツ主義史観の一種であることに変わりはない¹⁵⁾。

世界大恐慌でエステルライヒ共和国が危機に陥ると、H・R・v・スルビクは国民社会主義に接近していく。1933年前半の決定的転換点にスルビクが認めた書簡は残されていないが、喫NSDAPの蜂起が失敗して2箇月後の1934年4月、ベルン大学教授ヴェルナー・ネーフに宛ててこう書いている。「私は国民社会主義者ではありません。でも私は反国民社会主義の残忍な警察の恣意や学問の自由の抑圧の支持者でもありません。——そして私はロマン主義的なイデオロギーでも日和見主義者でもありません。そう言うだけで、私の気分を表現するには十分でしょう。私が承知しているのは全ドイツ的な文化だけで、分離主義的なドイツ文化ではありません。私は恐らく、議会の指導者たちよりエステルライヒ人でしょう。そしてまた私は、スラヴ系の名前にも拘らず、骨の髄までドイツ人なのです」¹⁶⁾。「全ドイツ史観」がスルビクを、身近な権力者ドルフスの敵対者にした様子が分かる。クルト・シュシュニツク政権下の1936年7月6日には、スルビク

は恩師レートリヒに詳しく NSDAP への態度を表明している。「簡潔に私は「第三帝国」及び国民社会主義に対する立場を述べたいと思います。二つのものは、外面的には同一と説明されていますが、精神的にはそうではありません。強制的体制がどんなに影響を及ぼしても、とにかく今日でもライヒ国民の少なくとも半分が国民社会主義を支持しています。国民社会主義運動は、原則を見るならば、二つの根源的で健全な要素を統合しています。それは国民的要素及び社会的要素です。後者は、以前は余りに過小評価されていましたが、いまやその権利を主張しています。この運動には理想主義的中核があります。ただそれは非常に多くの卑しい要素によって部分的に揺るがされたのです。ライヒ及び民族の対外政策的・軍事的な再興に関しては、国民社会主義は疑いなく非常に重要なことを成し遂げました。経済政策的な問題はまだ解決されていませんが、きっと解決されるでしょう——あらゆる指標がそれを指しています。諸悪の根源はなお精神的文化にあります。私は先生と同じく、大学や学問一般の深刻な危機を少しも見逃しませんが、やはり多くの人々に確かな仕事意欲、改善意欲があると思うのです。私は、ライヒの多くの学者たちと同じように、絶対否定の立場を取ることは誤りだと思うのです。」その上でスルビクは、「ローゼンバルクとその一味」を打倒すれば、NSDAP とは協力できると考えたのだった¹⁷⁾。

1938年3月12日、ドイツ国民社会主義政権は国防軍をエステルライヒ領に侵攻させ、合邦を断行した。同日正午、宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッベルスは、独逸のラジオ放送で総統及び帝国宰相アドルフ・ヒトラーの宣言を読み上げた——「ドイツ人たちよ！ 我々は数年来、深い悲しみを以てエステルライヒにおける我々の民族同胞の運命を体験してきた。1866年に初めて解消してしまったが、世界戦争で新たな確認を得た永遠の歴史的結合は、エステルライヒをずっと以前からドイツの民族・運命共同体に組み込んでいるのである」。翌日、ベルリン大学歴史学教授ヴィルヘルム・シュスラー（1888年-1965年）はスルビクに書き送っている。「私の若き日の夢が実現しました。昨日私は総統の宣言を、涙なしに聞くことができませんでした。リンツにおける宣言も同様です。一人のエステルライヒ人が真の国民国家を作ったというのは、何という組み合わせでしょう。ヒトラーだけがそれを為し得たのです」¹⁸⁾。一箇月後、スルビクもシュヴァイツ人のネーフに書いている。「いまやもうエステルライヒはなく、大ドイツ帝国

があるのみだということは、我々の長年試煉を経てきた関係を何ら変えるものではありません。故郷にはあらゆる忠誠を尽したにしても、この全く大きな目標に、私がどれだけ熱い情熱全てを注ぎ、私のささやかな仕事を傾けてきたか、あなたはご存知でしょう。異なる歴史的、領域政治的、国家的、理念的条件の下で生きているドイツ系シュヴァイツ人とは異なり、我々エステルライヒのドイツ人にとって、この発展は歴史及び自然によって与えられたものであり、大ドイツ的な帝国建設は国民の意志、一人のエステルライヒ人の比類ない行為の結果なのです¹⁹⁾。

この合邦の前後、H・R・v・スルビクはライヒ・ドイツとエステルライヒとを架橋する役割を担っていた。スルビクはすでに文部大臣時代、テオドル・ヴァーレンにヴィーン工科大学の教職を用意していた。このヴァーレンは、グライフスヴァルト大学で黒赤金の新国旗を引きずり降ろし、黒白赤の旧国旗に換えるという振舞で解雇された人物で、ヴィーン勤務を経て、国民社会主義政権下では文部行政の要職に就いた。1937年6月22日、スルビクは皇帝ヴィルヘルム協会のカール・ボッシュ総裁より同会理事に任命された（ただ理事会に出席したことは一度もなかった）。1938年、スルビクはNSDAP 党員、ドイツ帝国議会議員となった（スルビクはオストマルク帝国総督アルトゥール・ザイス＝インクヴァルトからエステルライヒの帝国議会議員候補として指名されたが、党員でないことがベルリンから問題視されたので、まず1938年5月に党員になったのだという）。1938・39年、スルビクは皇帝ヴィルヘルム歴史学研究所長の候補として名前が挙がり、それと関連して研究所自体をヴィーンに移す構想すらあった。1942年から45年まで、スルビクはエーリヒ・マルクスを継いで、高名な「バイエルン学術アカデミー歴史委員会」委員長となり、1943年に「歴史委員会」を「全ドイツ歴史委員会」とした²⁰⁾。

1938年11月23日、レートリヒに続きヴィーン学術アカデミー院長となったH・R・v・スルビクは、講演「大ドイツ帝国におけるドイツの学問とヴィーン・アカデミー」を行なった。ヴィーン学術アカデミーは、創立記念日の5月30日に毎年例会を開いていたが、この「転換の年」に当たって例外的に半年延期していたのである。この講演でスルビクは、ドイツ系エステルライヒ及びズデーテン地方とドイツ・ライヒとの「再統一」（Wiedervereinigung）を喜び、それを成し遂げた「指導者」（Führer）に喝采し、ヴィーンの学問も「ドイツ民族＝民衆」（deutsches Volk）に奉仕す

べきものであると高らかに宣言したのだった²¹⁾。

だが実現した大ドイツ帝国において、エステルライヒの存在感は薄くなっていった。なるほどヒトラーはエステルライヒ出身だったが、彼を指導者とする大ドイツ帝国は、ウィーンのプロブスブルク家を頂点とする連邦主義的大ドイツの再来ではなく、ベルリンを中心とする統一主義国家であった。「エステルライヒ」は合邦により、まずは「オストマルク」と改称され、更に一体性を失って分割された。エステルライヒ学界の総帥スルピクにも、そうしたベルリン中心主義を阻止することは難しかった。合邦から五箇月経った1938年8月、書籍の新しい分類法において、1918年以前のエステルライヒを独立国家として扱わない方針になったと聞いて、スルピクは「馬鹿げている」(Unsinn)と憤慨した²²⁾。国民社会主義政権の絶頂期に脱稿された1942年刊の『ドイツの一体性』第4巻は、ある意味エステルライヒ愛国主義者の自己主張とも解釈できる作品である。ここでスルピクは、第一次世界戦争における独逸同盟を全ドイツ的共同体の再現とし、「第三帝国」を中世ドイツ王国に連なるもの、神聖ローマ帝国やエステルライヒの後継国、欧州大陸を率いる超国民的使命を帯びたドイツ国民国家として捉えているが、大ドイツ帝国でのエステルライヒの地盤沈下には触れていない。政治に直接関与せず歴史学研究に邁進したとしてランケを理想視していたスルピクは、パリに赴いて近世史研究『ウィーンとヴェルサイユ——1692年-1697年』に取り組み、戦火が迫る1944年にこれを刊行しているが²³⁾、これは大ドイツ帝国の現実からの逃避だったのかもしれない。

敗戦でH・R・v・スルピクの大ドイツの夢は終わったが、彼の歴史研究は終わらなかった。60代後半のスルピクは占領下で何度も拘留され、毎週憲兵隊に出頭する義務も課された²⁴⁾。それでも1949年、スルピクは『エステルライヒの過去から——オイゲン公からフランツ・ヨーゼフまで』を刊行した。これはエステルライヒの軍人や君主に関する過去十年余りの講演などを編集した、軍事史的色彩の強い論文集だが、大ドイツ主義というよりエステルライヒ愛国主義、プロイセンとの競合が強調され、1918年以前のスルピクの論調を思わせる。これに対し1950・51年の浩瀚な『ドイツ人文主義から現代に至る精神と歴史』(二巻本)²⁵⁾では、スルピクは再び「全ドイツ史観」の立場からドイツ歴史学の発展を詳述した。スルピクは人文主義や啓蒙主義の時代を経て、ニーブール、ランケによりドイツ歴史

学が開花した経緯を描き、エステルライヒの貢献も随所で指摘している（なおニーブール論で弟子グラウエルトに言及しているのは、「ドイツ人」スルビクの自己主張だろう）。またスルビクは、小ドイツ主義史学を「国民主義的現実主義」と呼び、これに対抗して大ドイツ主義史学が形成されたと説いている。スルビクはエステルライヒ、そしてシュヴァイツやバルトにおけるドイツ人の歴史観にも言及している。その末尾で、スルビクは国民社会主義政権の人種主義をドイツの文化的発展からの離反だと批判しているが、自らの役割については触れなかった。スルビクは同書第一巻をマイネッケに献呈しているが、第二巻の草稿を弟子タラス・フォン・ボロダイケヴィチに託したまま、1951年2月16日に死去した。

2. ハインリヒ・リッター・フォン・スルビクのナショナリズム研究

それではH・R・v・スルビクの『ドイツの一体性』全四巻（1935/35/42/42年初版刊）、講演「エステルライヒにおけるドイツ史」（1938年刊）などを手掛かりに、彼の「全ドイツ史観」を見ていきたい。

(1) 中世から1740年まで

H・R・v・スルビクはドイツ的・普遍的理念の展開を描き、近世以降はその担い手としてのエステルライヒの皇帝権力に注目している。スルビクは、ドイツ民族が教皇の普遍的権威に対抗し、キリスト教理念を担う普遍的権力としてイタリアに、あるいは東欧に覇をなした様子を描いている。スルビクは、ドイツ民族を「必然性」の産物ではなく、「可能性」の産物と見る。スルビクはマクシミリアン一世、カール五世、レオポルト一世、ヨーゼフ一世、「若きフリードリヒの戦術教師」だったオイゲン公が、トルコやフランスの脅威から帝国を守ったとし、「国境大国」（Grenzmacht）エステルライヒの「オストマルクの運命」を（合邦以前の作品でも）指摘している²⁶⁾。

スルビクは、エステルライヒ及びハプスブルク家の普遍的使命を強調しつつ、同時にその「完全にドイツ的な」（ganz deutsch）性格を強調する。スルビクはハプスブルク君主制を「普遍君主制」（Universalmonarchie）と呼んでいるが、彼はその意味内容を、「カトリック的」、「世界王制的」、「中欧的＝帝國的」、「南東〔欧〕的＝領邦的」と言い換えている。「ドイツ的」

性格については、目を惹くのが普遍的支配者の代表格たるカール五世についての叙述で、「ブルグント・スペインと血がつながっている」が、「心情及び言語により再びドイツ化した」、息子たちには「ドイツの血」が圧倒的に通用するようになったと説明している²⁷⁾。

H・R・v・スルビクは「ドイツの自由」に懐疑的である。スルビクはそれがフランスのドイツ干渉を招き、「皇帝普遍主義」の制約になり、帝国を「もはや国家的実態がない」(*keine staatliche Wirklichkeit mehr*) 状態にしたと批判する。スルビクは、ハプスブルク家こそが「帝国の維持増進者」だったと考え、「皇帝軍とはエステルライヒ家軍であり、帝国軍だった」と論じ、「帝国＝帝国諸身分の共同体」というケムニッツの秩序観からは距離を置いている。ただヨーゼフ一世の頃までは皇帝が「皇帝・帝国理念を深く心に刻んでいた」ものの、徐々に帝国業務より領邦業務に邁進するようになり、弟のカール六世に至って帝国意識・ドイツ意識が減退し、マリア・テレジアはフランスと同盟して帝国のライン川防衛を減退させ、ヨーゼフ二世は帝国官庁をエステルライヒ世襲領官庁に変えたと見ている²⁸⁾。

(2) 「二元体制」(Dualismus) の成立

H・R・v・スルビクはブランデンブルク＝プロイセンの擡頭も描いている。スルビクはそれをドイツ民族の一方の担い手とは認め、エステルライヒのドイツ音楽文化(グルック、ハイドン、モーツァルト)と並立するプロイセンの「北ドイツの精神性」を語り、17世紀に皇帝と共に外敵と戦った経歴も振り返るが、プロイセンは世界的理念の担い手ではなかったとし、皇帝にとっての障礙になったことも指摘する。スルビクはフリードリヒ二世を、ハプスブルク家を憎悪する「強大な帝国破壊者」(*der große Zerstörer des Reichs*) だとし、「大王」とは呼ばない。彼がヴィッテルスバッハ家の皇帝カール七世を支持したことについては、皇帝権を「反ハプスブルク闘争」の道具にしたに過ぎないと見る。フリードリヒ二世は多くのドイツ人に「ドイツの名誉」の象徴と仰がれたが、自分自身はロココと啓蒙の信奉者で、ドイツの文化意識を有しなかったとする。また「プロイセン国民」(*Staatsvolk*) は「主体ではなく客体」であり、プロイセン国家は厳格で「精神的なものから目を背けた」ものだったという。これに対して「高貴な心の美しさ」「英雄的で、勇敢で、不屈の精神」「形成されつつあるエステルライヒ精神」を有するとされるのが、「最後のハプスブルク家の娘」、

「生まれも感覚もドイツ的な女性」マリア・テレジアである（フランツ一世については「非ドイツのロレーヌ」から来たと冷たい）。ただマリア・テレジアの時代に、普遍的な帝国・皇帝理念と結び付いたバロックが、ロココや啓蒙に取って代わられたともする。スルビクは、カール七世の選出で皇帝権あるいはハプスブルク家の権威が損なわれ、カウニッツやヨーゼフ二世の時代にヴィーン宮廷が帝国政治を去ってエステルライヒ国家強化に邁進するようになったことを強調する。また自然法思想、啓蒙思想に影響されたヨーゼフ二世の改革が混乱を招き、東欧での領土拡張もスラヴ系・ルーマニア系住民を増加させ、ドイツ色を薄めたと批判している。「ハプスブルク皇帝権の古い支柱」だった聖界諸侯を脅かし、マインツ大司教などをプロイセン主導の諸侯同盟に走らせたのも、スルビクはヨーゼフ二世の失敗だとし、ヨーゼフ二世もフリードリヒ二世も共に帝国憲法を軽蔑していたとする。これに対し、巧みな融和路線で諸侯同盟の解消を試みたレオポルト二世へ評価は高い。スルビクは、帝国の統率力が弱体化しつつあった、フランス、スウェーデン、ロシアの介入があったとしつつも、千年も続いた帝国にはなお歴史の力があったとする。また帝国が国家として必要な権力機構を備えなかったことで、ドイツ語や「ドイツの自由」など精神面への矜持が高まったとし、ヴィーン宮城劇場でのドイツ語演劇の振興などを引きつつ、「精神的国民」はなかったが「文化的国民」はあったとする。革命後の対仏戦争に関しては、奥普両大国が自国の利益に走って帝国を顧みなかったとし、トゥグート政治指導を批判的に見ている²⁹⁾。

(3) 神聖ローマ帝国の崩壊

H・R・v・スルビクにとって神聖ローマ帝国崩壊は悲劇である。スルビクはナポレオンの帝制樹立に端を発するエステルライヒ帝制の樹立を、ハプスブルク家の皇帝位喪失の危惧からのものとしつつ、明瞭な帝国法違反であったこと、背景に（ヨーゼフ二世が目指したような）合理主義的絶対君主制樹立構想があったこと、フランツ二世には帝国との深い一体感がなかったことを指摘する。スルビクはまた、帝国大宰相ダールベルクがフェッシュ枢機卿を協働司教に登用し、ナポレオンをローマ皇帝に迎えようとしたことにも批判的である。ライン同盟樹立に帝国理念の継承を見ることもない。なおスルビクは、神聖ローマ帝国はその崩壊直前に「ドイツ帝国」の呼称を得たとしている³⁰⁾。

H・R・v・スルビクは、ナポレオンによる帝国解体後、「第三のドイツ」の普遍主義者が「西洋の皇帝」としてのナポレオンを称揚するなかで、塙普両国が独自の国家・国民形成に向かったとする。スルビクはエステルライヒ国家・国民形成を、ヨーゼフ二世らに由来し、エステルライヒのドイツからの分離に通じたものと見ている。しかし当時のエステルライヒには、国民国家形成を目指したわけではないが、まだドイツ意識も併存しており、1809年の「ドイツ人の第一次解放戦争」を率いた、ハプスブルク家はドイツ連邦でも帝冠は帯びないまま、旧来の皇帝と帝国の栄光の「微光」(Schimmer)を帯びていたという。スルビクは、ナポレオン覇権が体现する啓蒙的秩序に対抗してロマン主義運動が起ったことを述べ、シュタインを「国民国家理念に向けてドイツ人を教育した最初の人物」として称揚し、その帝国・皇帝復活構想を紹介している。またハルデンベルクらに引き継がれたプロイセン改革も、愛国心を涵養したものと評価している。なおスルビクは、ライン同盟を「失神」(Ohnmacht)と呼び、それに塙普のように紙面を割くことはない³¹⁾。

(4) メッテルニヒ時代

H・R・v・スルビクはヴィーン体制を両義的に評価する。「ドイツ帝制」再興の断念、「エステルライヒ帝冠」の自立化、ライン川防衛のプロイセンへの委託については、エステルライヒの「ドイツの将来には深刻な不利益」になったとする。とはいえスルビクはドイツ連邦を「全ドイツの政治共同体形式」と呼び、今日の評判よりはよいものだったとし、「国家理念、民族理念」は欠きつつも、「議長国」(Präsidialmacht)エステルライヒの下で「帝国理念」が静かに生き続けたと評価する³²⁾。

H・R・v・スルビクはメッテルニヒ侯爵の指導したエステルライヒが、時流に乗り遅れて硬直化し、ドイツ国民運動から乖離していった様子を描いている。欧州、中欧、エステルライヒを見据えるメッテルニヒは、ドイツ国民の熱狂を抑え、エステルライヒ国家国民理念を強調した。スルビクはメッテルニヒを、「メタ政治家、現実主義者、欧州人、エステルライヒの義務に忠実な政治家」と呼ぶ。スルビクは、エステルライヒにプロイセンのような「若返りの過程」がなかったこと、ヴィーンが保守的国民・欧州理念の中心地になったことを指摘している。しかしスルビクは、トライチュケがメッテルニヒを否定したのに対し、ビスマルクがこれを窘めて

メッテルニヒを高く評価したことを指摘する。エステルライヒを中心とする「保守主義」(Konservativismus)に、個人の自立を重視する「自由主義」(Liberalismus)、自然法理念の子であり平等を重視する「民主主義」(Demokratie) (あるいは「過激主義」(Radikalismus)) が対峙する「三つ巴のドイツ」(das dreifache Deutschland) で、自由主義者(経済面では保護主義者)フリードリヒ・リストの提唱するドイツ関税同盟からエステルライヒは除外され、同じ頃精神面でもエステルライヒはドイツにとって「外国」(Ausland) だという認識が拡大していったとする³³⁾。

H・R・v・スルビクは、「ドイツ指導国」だったエステルライヒが、「内なる生命力」より「伝統の力」でまとまり、この国家の「ドイツの本質」に抗する「異民族」(Fremdvölker) の反対運動を招いたことを悲劇と見る。スルビクは、自由主義と結び付いた国民運動とエステルライヒが共に歩めなかった、つまり「道徳的征服」(moralische Eroberungen) ができなかったことを遺憾とするのであり、結局ここに彼がプロイセンを模範視していることが現れている。スルビクは、すでに1847年にバイエルン王国のカール・ライニンゲン侯爵がエステルライヒのドイツからの退場を求めたように、小ドイツ主義的統一の芽が三月革命前からあったことを指摘する。このため三月革命の叙述も、エステルライヒがドイツから疎外されていく過程を描くものとなる。三月革命でエステルライヒは、その「ビザンツ的絶対主義」が西欧の自由主義や民主主義の挑戦を受けただけでなく、「ドイツ的・中央集権的=家父長主義的国家」体制が覚醒した国家内諸民族の挑戦を受けたのである。1848年夏の時点ではエステルライヒ排除を考える者はごく少数だったが、年末には「大ドイツ」か「小ドイツ」かの二項対立が生じてしまったという。それでも「ドイツ人であることを自負する」(deutschgesinnt) ヨハン大公が「帝国摂政」に選ばれたことは、エステルライヒのドイツ人の「救済」には必要なことだったという³⁴⁾。

(5) シュヴァルツェンベルク時代

H・R・v・スルビクは三月革命からドイツ連邦再建に至る過程を、奥宰相フェリクス・シュヴァルツェンベルク侯爵を中心に描いている。プロイセンはフリードリヒ・ヴィルヘルム四世、ラドヴィッツの下で北ドイツ中心の「ドイツ連合」を目指したが、二人はヴィルヘルム一世、ビスマルクのような能力は発揮できなかった。プロイセンの動きを警戒したバイエル

ン、ヴェルテンベルクは、エステルライヒに接近した。結局奥露はオルミッツでプロイセンに「ドイツ連合」を断念させたが、スルビクはドイツの死活問題だった国民国家建設が遠のいたとする。大エステルライヒ主義者シュヴァルツェンベルクは、エステルライヒ国家のドイツ部分・非ドイツ部分への二分割を拒否し、それが丸ごとドイツ連邦と一体化し、エステルライヒのドイツ主導国としての歴史的地位を維持するという「七千万人帝国」(Siebzigmillionenreich)を目指した。またプロイセンを協力させ、共に革命に立ち向かう体制を作ろうとした。シュヴァルツェンベルクが、従来不参加だったドイツ関税同盟にエステルライヒを組み込もうとし、その準備にエステルライヒ国家の経済的統一化をしたが、結局順調に行かず、ドイツ連邦の再建に至った経緯を、スルビクは詳細に描いている。スルビクは、失われたかに見えたエステルライヒの地位を恢復した政治家シュヴァルツェンベルクの手腕に深い敬意を表し、彼はプロイセンの邪魔をしたただけだとする批判を退けつつも、彼が「国民的衝動の迫力」を過小評価したことは「誤謬」だったと批判している³⁵⁾。

(6) イタリア統一戦争

H・R・v・スルビクは、シュヴァルツェンベルク急死後、フランツ・ヨーゼフ一世やバッハが国家統一化・ドイツ化を図り、経済を振興し、1855年の政教条約でヨーゼフ体制を清算してカトリック教会と協力するに至ったことを描いている。スルビクは、プロイセンが立憲君主国・非宗派国家になった時代に、逆にエステルライヒが絶対君主国・カトリック国家になったこと、シュヴァルツェンベルク外交の結果として再建されたドイツ連邦で独逸対立が激化したこと、「第三のドイツ」が革命の再発やプロイセンの擡頭を恐れエステルライヒに期待していたことを指摘する³⁶⁾。

H・R・v・スルビクは連邦議会のプロイセン使節ビスマルクに注目する。スルビクは、マントイフェル首相もビスマルクも普奥対等化を目標にしたが、革命を恐れる前者は後者ほど対決姿勢を取らなかったとする。スルビクはビスマルクのなかに、メッテルニヒ的精神(保守的協調)とシュヴァルツェンベルク的精神(権力エゴイズム)とがあったと表現する。スルビクはまた第三極になろうとしたバイエルンの動きも追跡している³⁷⁾。

H・R・v・スルビクは、フランツ・ヨーゼフ一世と外相カール・フェルディナント・フォン・ブオル＝シャウエンシュタイン伯爵の時代、エステ

ルライヒが孤立していった様子を描いている。解放戦争以来の東方三帝国の団結は、三月革命を挟み、オルミュッツ、ドレスデンで再建されたが、クリミア戦争で破壊された。スルビクは、クリミア戦争での中立のあとエステルライヒが土英仏に加担したことがドイツ諸国の理解を得られなかったこと、自由主義的イギリスと保守強硬のエステルライヒとの対普同盟、その結果としての普仏同盟が不自然だったことを指摘し、ノイエンプルク問題を取り上げている。イタリア統一戦争では、フランスがエステルライヒに勝利し、ロシアがエステルライヒにクリミア戦争時の報復を行い、輿論がイタリア側に立つイギリスも、ドイツ連邦改革を要求するプロイセンも傍観し、ヴィーン最終議定書第47条でドイツ連邦参加国に義務付けられていた共同防衛も行われなかったため、エステルライヒの地位の破壊が進んだとする。またプロイセンの自由主義者はエステルライヒの凋落を望み、逆にカトリック系言論界はドイツの分裂に警戒したとする。スルビクは、ロンバルディアの喪失自体はシュタディオンやメッテルニヒも想定したことで重要ではないが、問題はエステルライヒの欧州大陸の一指導国としての体面が損なわれたことだったとする³⁸⁾。

H・R・v・スルビクは、イタリア統一戦争ではプロイセンですら興奮したのに、ソルフェリーノの敗戦でエステルライヒの権威が落ち、ドイツの将来を巡る議論が起こったとする。スルビクは、そうしたなかでもドイツ民族の多数派は大ドイツ主義に傾斜していたとし、コンスタンティン・フランツ、政治的カトリシズムなどを挙げ、プロイセン中心主義だったグスタフ・ドロイゼンと対置している。スルビクは1859年のシラー生誕百周年が、ドイツ人の一体性への意思表示になったという。スルビクはここでユダヤ人問題も扱っており、国際的つながりをもち、長年純粋性を守ってきたユダヤ人に経済的・宗教的理由から反感が生まれ、エドムント・イエルクなどが彼らを批判したことが指摘されている³⁹⁾。

H・R・v・スルビクは普墺の状況を概観している。前者に関してはビスマルクに注目し、王妃アウグスタ、王太子フリードリヒ・ヴィルヘルムなど対抗勢力に言及している。エステルライヒに関しては、イタリアでの敗戦後に従来の中央集権、絶対主義を改めるとする1859年7月15日のラクセンブルク宣言が皇帝により出されたが、それは実行されていないとの不満が各方面に広まり、1861年の二月憲法制定でもその印象が強まったという。大臣のなかで自由主義的且つ現実主義的なシュメルリングのみが事

態を見通していたとするが、フランツ・ヨーゼフ一世は相次ぐ悲劇に打ちのめされながらも政党の上に立って政治を指導し、内政は大臣に任せても外交軍事を崩御まで君主の権限として維持したことを指摘し、彼の政治がドイツ国民国家理念から縁遠く、エステルライヒ国家の維持に固執し、活発な理念のない守りの政治であったことを批判する。スルビクは皇帝と対置して首相レヒベルク以下、外交官など関係者を詳解している⁴⁰⁾。

H・R・v・スルビクは「第三のドイツ」の動向にも目を配る。その叙述は、他国に脅威を感じさせないには大きすぎ、指導国となるには小さすぎるバイエルン王国、それに次ぐ大きさのヴュルテンベルク王国から始まり、自らは影響力を行使し得ない小国にも及ぶ。スルビクは、エステルライヒのドイツ残存を望む大ドイツ主義が少なくなかったこと、バイエルンやヴュルテンベルクでは自国の自律性への固執からプロイセンの覇権に抵抗があったこと、バーデン大公国やザクセン王国ではエステルライヒの退場によるプロイセン中心の、あるいはプロイセンも除く「ドイツ合衆国」(連邦国家)への期待があったことなどを記している。のちにエステルライヒ帝国宰相になるザクセン首相ボイスト男爵(のち伯爵)については、その大ドイツ主義的、分邦割拠主義的傾向の詳説がなされている⁴¹⁾。

(7) ドイツ連邦の崩壊

H・R・v・スルビクは、エステルライヒが追い詰められていった1860年前後の展開を詳細に追っている。堯普の非公式新聞を通じてのメディア戦(ビスマルクの当初の不人気)、プロイセンのエゴイズムに反撥した中小諸国のヴュルツブルク連合(主宰ボイスト)、フランツ・ヨーゼフ一世のナポレオン三世への接近の試み、ライン国境設定を念頭に置いた普仏接近の試み、プロイセンのフランスとの対決、テプリッツでの堯普連合の試み、ザクセン首相ボイストの仲介の試み、エステルライヒのドイツ諸国との経済的一体化の失敗、プロイセンのイタリア王国承認などである⁴²⁾。

H・R・v・スルビクは、プロイセン外相がバルンシュトルフからビスマルクに交代して、プロイセン外交が変化した様子を描いている。ビスマルクは、エステルライヒがプロイセンをいつでもどこでも抑えつけようとすると確信し、首相・外相就任でエステルライヒと対決姿勢を採った。ただポーランド蜂起に際しては、中小ドイツ諸国を巻き込んでポーランド支援に乗り出すフランスに対抗し、ビスマルクが堯露と連帯してその鎮圧に当

たる方針を採り、やがて奥普共同でシュレスヴィヒ・ホルシュタイン両公国を巡るデンマークとの対立に入ってしまった様子を描いている。スルビクがビスマルクを「革命家」と呼んでいるのは、のちのロタール・ガルの「白色革命家」論を想起させる表現法である⁴³⁾。

ドイツ連邦の存続、大ドイツの一体性維持のためのエステルライヒの悲劇的闘いを、H・R・v・スルビクは詳細に描いている。スルビクは、エステルライヒがドイツ連邦の連邦国家化を試み、フランクフルトに「諸侯会議」(Fürstentag)を盛大に召集し、ドイツ愛国主義を懸命に喚起したが、プロイセンの不参加で有効なものとならなかったことを指摘している。また対デンマーク紛争で奥普同盟が成立したが、「議長国」エステルライヒの紛争回避努力にも拘らず、ドイツ連邦が占領したシュレスヴィヒ・ホルシュタインを併合しようとするビスマルクの政策に翻弄され、プロイセンの自己主張で開戦を回避できなくなったこと、エステルライヒがその軍が駐屯するホルシュタインにプロイセンが侵攻したことをドイツ連邦の場で非難し、バイエルン王国、ヴュルテンベルク王国、ハノーファー王国、ザクセン王国、バーデン大公国を始め主要ドイツ諸国が悉くエステルライヒ側、ドイツ連邦側でプロイセン征伐に挙兵したのに、プロイセン王国が勝利して「全ドイツ団体」(der gesamtdeutsche Körper)が崩壊した過程を描いている。スルビクは、ドイツ戦争がプロイセンにより長期間準備された権力拡大のための戦争だったとするモルトケを援用しつつ、プロイセン保守派が最後まで普奥同盟に固執していたことを指摘している⁴⁴⁾。

(8) 「第二帝国」・シュヴァイツ・バルト・エステルライヒ・「第三帝国」

1860年代に勃興した小ドイツ主義史学を、H・R・v・スルビクは「国民主義的現実主義」と呼ぶ。グスタフ・ドロイゼン、ルートヴィヒ・ホイサー、ハインリヒ・フォン・ジーベル、ヘルマン・バウムガルテン、ハインリヒ・フォン・トライチュケらの行動主義を前に、ロマン主義も消滅したといい、国民国家、立憲君主制国家、法治国家の樹立を目指して、そこで実現される自由を支持したとする。歴史学の党派性を当然視して、前世代のランケの「宦官のような客観性」を揶揄したとする⁴⁵⁾。

H・R・v・スルビクは、「第二帝国」において小ドイツ主義史学のランケ批判からの揺り戻しがあったとし、またトライチュケらの「プロイセン中心主義」(Borussismus)に抗して、ドイツ帝国のカトリック圏や「ドイツ

生まれの家門ハプスブルク家」を頂くエステルライヒで普遍主義、ロマン主義、旧帝権や統一した教会への憧憬などから、大ドイツ主義史学が生まれたことを指摘し、コンスタンティン・フランツ、ヨーゼフ・ゲレス、イグナッツ・デリンガーらを紹介している。その契機は、ジーベル・フィッカー論争であり、スルビクはどちらも同時代の政治状況（イタリア統一戦争でのエステルライヒの敗北）から自由ではなかったとする。文化闘争に関しては、ビスマルクがカトリシズムへの深い理解もないまま、対外的安全及び国内的団結のために始めた政治闘争で、これによりカトリック教会は活力を増し、プロテスタント教会は大きな損害を蒙ったとする⁴⁶⁾。

H・R・v・スルビクは「全ドイツ史観」にシュヴァイツやバルトの「ドイツ史学」(deutsche Historiographie) も包含している。シュヴァイツで挙げるのはヨハンネス・フォン・ミュラー、ヤーコプ・ブルクハルトらであり、バルトであげるのはカール・シレンである⁴⁷⁾。

H・R・v・スルビクはフランツ・ヨーゼフ期のエステルライヒがその中核においてドイツ的であり続けたこと、ライヒ・ドイツ人とエステルライヒ系ドイツ人との絆が維持されたこと、第一次世界戦争がその絆を確認する機会になったことを強調する。同時にエステルライヒ系ドイツ人がバイエルン系、アレマン系、フランケン系ドイツ人と並び、反宗教改革などを通じて独自の特徴を育んだことを指摘する。スルビクは、エステルライヒではナショナリズムと自由主義とが離反していったこと、ナショナリストにはゲオルク・フォン・シェーネラーのように国家解体を求める者もいたことを指摘している。スルビクはアウグスト・フルニエなどエステルライヒの歴史家を紹介しつつ、ベルリン大学教授ハインリヒ・ブルンナーのように全ドイツ的に活躍したエステルライヒ出身者にも注目している⁴⁸⁾。

H・R・v・スルビクは「国家」(Staat) より「民族」(Volk)、「民族共同体」(Volksgemeinschaft) に注目するという学風を紹介する。スルビクは「民族学」(Volkskunde) という呼称で、東方植民をしたドイツ人の歴史研究を扱っている。スルビクは、第二次世界戦争後にドイツ人が追放され、「民族学」の基盤が失われたことを指摘しつつも、「希望はこの領域でも死ぬことを許されない」とする。そしてスルビクは、大ドイツ主義史学、小ドイツ主義史学を越える「全ドイツ史観」に言及する。スルビクによれば、「全ドイツ主義史観」とは「旧帝国及びドイツの普遍主義の真の継承者」エステルライヒで芽生えた、帝国理念と民族概念との結合なのであり、できる

限りの客観性を求め、ランケの普遍主義や西洋意識と中欧的・国民国家的思考とを統合したもので、政治に対する認識の優位、あらゆる党派のイデオロギーに対する価値判断上の精神的・倫理的規律を支持するものだという。最晩年のスルビクは、この「全ドイツ史観」が国民社会主義と同視されることを拒否し、人種主義の反普遍主義的性格を厳しく批判している。スルビクは、人種主義、特に人種主義的反ユダヤ主義がゴビノー、ダーウィン、トライチュケ、チェンバレンによって形成され、小ドイツ主義史学を経て国民社会主義へと通じる過程を批判的に描き、これを「全ドイツ史観」と区別しようとするのである。曰く「国民社会主義は数世紀に亙るドイツの発展経過と、その起源において何ら深い精神的関係にない」⁴⁹⁾。

3. 考察

(1) H・R・v・スルビクの「全ドイツ史観」は政治運動そのものである。それは、期せずして不可能の領域から可能の領域に入った独逸合邦の夢を実現に導きたい、ヴェルサイユ体制下で各国に分散を余儀なくされ、不利益取扱を受けている中東欧のドイツ人と連帯したいという、戦間期の大ドイツ主義的願望を素直に反映したものである。それが、敗戦後体制の歴史的正当化に邁進した H=U・ヴェーラーら「ドイツ社会史派」と同じく、教壇預言、つまり学問の権威を帯びた政治運動であることは明らかである。エステルライヒ第二共和国で、スルビクにおける政治と学問との結び付きが批判的に論じられてきたのは、不可避のことであった⁵⁰⁾。

(2) H・R・v・スルビクは「全ドイツ史観」を「大ドイツ主義史学」と区別したが、実際には前者は後者の一流派と見るべきである。マイネッケ、マルクス、アンドレアスらライヒ・ドイツ系歴史家と有益な交流をするためなのか、スルビクは可能な限りプロイセンからも学ぼうとし、その価値基準も踏襲している面がある。スルビクの理想は国民自由主義で、それがビスマルクの同盟者にはなかったが、保守的な19世紀エステルライヒで国家の指導理念にならなかったことを慨嘆しているのである。だがスルビクの歴史叙述は常にエステルライヒ愛国主義で満ちており、彼が止揚したと考える「大ドイツ主義史学」と本質において変わらないと見るべきだろう。

(3) H・R・v・スルビクは戦間期の「民族=民衆史」の担い手の一人だが、鍵概念である「民族」の定義ははっきりしない。同時代のハンス・ロート

フェルスやヘルマン・オバンの例を見ても分かるように、戦間期の「民族＝民衆史」というものは、Volk の Staat に対する優先という思考を出発点としているが、ドイツ帝国、ハプスブルク帝国の崩壊に伴うドイツ系住民の離散、君主制崩壊に伴う民主主義の擡頭を反映した歴史叙述法で、後者の側面では（その論者が反民主主義の立場にあった場合でも結果的には）第二次世界戦争後の「社会史」を準備した面もある。

「民族＝民衆」(Volk) と「国民」(Nation) との区別に関して、スルビクが集団としての政治的自覚が乏しいか明確かで使い分けているように見えるが、これはマイネッケの影響かもしれない⁵¹⁾。スルビク自身が、父方がスラヴ系の出自であったために、民族とは何かを考える際に、当人の帰属意識の存否を重視したのだらうということは想像に難くない。

スルビクの「民族＝民衆史」は生物学的ではないと、今日の批判者も述べており⁵²⁾、彼自身も最晩年に人種主義に距離を置いているが、この点は評価が難しい。彼が血統によりドイツ人・非ドイツ人を機械的に振り分ける傾向にあったわけではないことは、自分やカール五世の評価などを見ても明らかで、やはりドイツ語圏文化への帰依が最大の条件だったと思われるが、「ドイツの血」のような表現を繰り返ししていたことも考えると、スルビクの「民族」概念が血統と無関係だったわけでもなさそうである。

(4) H・R・v・スルビクの「全ドイツ史観」と国民社会主義とは、実際には様々な連続性がある。エステルライヒ側からのプロイセンへの一定の敬意、人種主義との微妙な関係、ユダヤ人への批判的言及、NSDAP によるドイツ文化刷新への期待、ドイツ主導の中欧諸民族秩序構想など、両者を結ぶ共通項は少なくなく、彼が1938年の合邦を積極的に支持したのは驚くに当たらない。戦後のスルビクはその点を棚上げして、相違点のみを強調している印象がある。ただ飽くまでエステルライヒ中心に拘るスルビクと、ベルリン中心主義の国民社会主義とは相容れない面もあった。学者スルビクが、NSDAP の粗野な側面に違和感を懷いたこともあった。

(5) H・R・v・スルビクの「全ドイツ史観」は、国民的要素と普遍的要素とが歴史的に並行していたとするところに特徴がある。スルビクが国民国家理念に背を向けて帝国理念（「中欧的夢物語」）に向かったという批判は、当時からフリッツ・ハルトゥングやエーリヒ・ブランデンブルクらライヒ・ドイツ系歴史家から起きていたという⁵³⁾。確かにスルビクは、東欧諸民族における国民国家理念の強さを軽視し、ドイツ主導の中欧という甘い

見通しを持っていたかもしれないが、ドイツ民族に関しては国民的要素と普遍的要素との並立を見ていたとする他はない。

(6) H・R・v・スルビクは宗派対立には興味が薄く、カトリック教徒ではあっても、カトリック・アイデンティティは強くない。彼にとって宗派対立はドイツ国民統一の夾雑物であり、カトリック系ドイツ諸国・諸民族の連帯にも興味はなかったのかもしれない。

(7) H・R・v・スルビクはエステルライヒ中心の視点に立ち、プロイセンのこともそれなりに理解しようとするが、「第三のドイツ」の視点は弱い。バイエルンなど中規模領邦への言及は若干あるが、聖界諸侯、都市、帝国騎士などへの視点がほぼない。ライン同盟への無関心も、フランスの傀儡だったからというだけではなく、「第三のドイツ」への共感の薄さと関係があるだろう。ライン同盟を再現したような西独でスルビクが敬遠されていたのは、こうした彼の傾向と無縁ではないだろう。

(8) H・R・v・スルビクは中欧諸民族をドイツ民族の覇権に従うべき存在とみなしている。スルビクは多民族共生の実験場としての19世紀末「ハプスブルク帝国」(Habsburgermonarchie)を称揚するのではなく、他民族を含むドイツ国家「エステルライヒ」の顕彰者である。彼のチェスコ系の実家が徐々にドイツ化し、ドイツ系支配者ハプスブルク家の忠臣となったように、中欧諸民族が徐々にヴィーン宮廷の支配に服していくのが、本来あるべき姿だと考えているのである。

スルビクのそうしたドイツ中心の中東欧観は、今日では侵略戦争の思想的準備になったと批判されている⁵⁴⁾。確かに1930年代の文脈でそのような意味を有したことは否定できないだろう。ただスルビク自身は、ドイツ民族の中東欧覇権はハード・パワーというよりソフト・パワーによって維持されるものと(楽観的に)考えていたように見受けられる。

以上8点に互りH・R・v・スルビクのナショナリズム研究を批判的に検討してきた。蓋しスルビクの歴史学は、国家の存亡を賭けた政治闘争の渦中で歴史研究をすることの難しさを実感させるものである。スルビクは歴史学の客観性を主張するランケに傾倒し、ドロイゼンらと対峙したが、実はランケもスルビクもプロイセンあるいはエステルライヒという祖国から自由ではなかった。スルビクの作品はかなり慎重に読まれなければならない、彼と国民社会主義政権との関係も軽微とは言えないものがある。

とはいえH・R・v・スルビクの作品は、戦後に封印された歴史の一面を

垣間見せるものとして、今日でも啓発的である。帝制末期のエステルライヒ史は、冷戦末期以来多民族共存が強調される傾向にあり、現代エステルライヒの歴史家たちも「エステルライヒにおけるドイツ史」を正視せず、独逸分離を自然な流れであるかのように見せようとするからである。スルビクを読む者は、そうした戦後歴史学の偏向性に気付かされ、普遍的潮流とドイツ国民の潮流とが、ゼロサム関係ではなかったことを知るのである。ドイツ政治との深い関係性ゆえに、スルビクを学問的に無視するということはできない。

注

- 1) 大石俊一『英語帝国主義論——英語支配をどうするのか』(近代文芸社、平成9年)；施光恒『英語化は愚民化——日本の国力が地に落ちる』(集英社、平成27年)。
- 2) 丸山眞男「科学としての政治学」『丸山眞男集』第3巻(岩波書店、平成7年)、137頁。
- 3) Hans-Ulrich Wehler (Hrsg.), *Deutsche Historiker*, 9 Bde., Göttingen 1971-1982.
- 4) Karl Dietrich Erdmann, *Die Spur Österreichs in der deutschen Geschichte. Drei Staaten – zwei Nationen – ein Volk?*, Zürich: Manesse Bücherei, 1989.
- 5) 村上淳一はスルビクなどを介して帝国国制に着目し、二つの帝国裁判所の存在が領邦絶対主義を阻害したと主張した(「「良き旧き法」と帝国国制」『法學協會雑誌』第90巻第10号(昭和48年)、1-48(1241-1288)頁、同第11号(昭和48年)、25-74(1409-1458)頁、第91巻第2号(昭和49年)、1-44(209-252)頁)。大原俊一郎は、スルビクのメッテルニヒ外交論を「普遍史的理解」の一例として紹介した(「ウィーン体制期国際秩序への普遍史的理解の深化——19世紀国際政治史における自由主義の影響」『亜細亜法学』第51号(平成29年)、333-352頁)。梶原克彦は、スルビクやシュシュニツクが傾倒したオンノー・クロップ(1822-1903年：ドイツ戦争でエステルライヒに移住したハノーファーのヴェルフェン勤王派・フランツ・フェルディナント大公の家庭教師)のことを紹介している(「O・クロップと総ドイツ主義——オーストリア国民論の系譜学四」『愛媛法学会雑誌』第42巻第1号(平成27年)、215-226頁)。

近年の日本では戦間期エステルライヒに関する優れた研究も多いが、管見の限りスルビクに関する考察は見当たらない(村松恵二『カトリック政治思想とファシズム』(創文社、平成18年)；板橋拓己『中欧の模索——ドイツ・ナショナリズムの一考察』(創文社、平成22年)；高橋義彦『カール・クラ

ウスと危機のオーストリア』(慶應義塾大学出版会、平成28年))。

- 6) Heinrich Ritter von Srbik, Die Beziehungen von Staat und Kirche in Österreich während des Mittelalters, Leipzig: K.F. Koehler, 1938.
- 7) Adam Wandruszka, Einführung, in: Heinrich Ritter von Srbik, Die wissenschaftliche Korrespondenz des Historikers 1912–1945, Boppard am Rhein: Harald Boldt, 1988, S. XI–XIII; Brief von Srbik an Ferdinand Bilger, Wien 14. November 1942, in: Ebenda, S. 537; Fritz Fellner, Heinrich Ritter von Srbik, in: Neue Deutsche Biographie [NDB], Bd. 24, Berlin: Duncker & Humblot, 2010, S. 773 f.
- 8) Wandruszka, Einführung, S. XIII–XIV; Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 3, 5; Brief von Srbik an Oswald Redlich, Graz 13. Juni 1914, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 36; Brief von Srbik an Oswald Redlich, Graz 19. Juni 1914, in: Ebenda, S. 37 f.; Fellner, Heinrich Ritter von Srbik, S. 774.
- 9) Wandruszka, Einführung, S. XV; Brief von Srbik an Wilhelm Bauer, Graz 26. August 1914, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 46; Brief von Srbik an Hans Hirsch, Graz 11. Juni 1915, in: Ebenda, S. 52 f.; Brief von Srbik an Emil von Ottenthal, Graz 14. Juni 1915, in: Ebenda, S. 54 f.; Fellner, Heinrich Ritter von Srbik, S. 774.
- 10) Brief von Srbik an Oswald Redlich, Graz 30. Oktober 1918, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 99; Brief von Srbik an Wilhelm Bauer, Graz 24. November 1918, in: Ebenda, S. 102 f.; Brief von Srbik an Hans Hirsch, Graz 9. Dezember 1918, in: Ebenda, S. 106; Brief von Srbik an Wilhelm Bauer, Graz 9. Dezember 1918, in: Ebenda, S. 107; Brief von Srbik an Oswald Redlich, Graz 9. Februar 1919, in: Ebenda, S. 114; Wandruszka, Einführung, S. XIV–XV; Fellner, Heinrich Ritter von Srbik, S. 774.
- 11) Brief von Srbik an Oswald Redlich, Graz 9. Februar 1919, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 114; Brief von Srbik an Friedrich Meinecke, Graz 13. November 1921, in: Ebenda, S. 183.
- 12) Brief von Srbik an Wilhelm Bauer, Graz 29. November 1921, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 186; Brief von Srbik an Werner Näf, Wien 9. April 1934, in: Ebenda, S. 397.
- 13) Brief von Srbik an Friedrich Meinecke, Graz 13. November 1921, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 183; Brief von Erich Marcks an Srbik, Berlin-Charlottenburg 24. April 1935, in: Ebenda, S. 410; Brief von Friedrich Meinecke an Srbik, Berlin-Dahlem 26. April 1935, in: Ebenda, S. 412; Brief von Srbik an Willy Andreas, Wien 25. März 1924, in: Ebenda, S. 183.
- 14) Brief von Srbik an Emil von Ottenthal, Graz 25. Januar 1922, in: Die

- wissenschaftliche Korrespondenz, S. 190; Brief von Srbik an Werner Näf, Wien 9. April 1934, in: Ebenda, S. 397; Brief von Bernhard Seuffert an Srbik, Graz 7. Mai 1935, in: Ebenda, S. 413; Wandruszka, Einführung, S. XV–XVI; Fellner, Heinrich Ritter von Srbik, S. 774.
- 15) Srbik, Gesamtdetsche Geschichtsauffassung, Leipzig/Berlin: B. G. Teubner, 1932; Ders., Österreich in der deutschen Geschichte, 3. Aufl., F. Bruckmann, 1938 [以下では Österreich].
- 16) Brief von Bernhard Seuffert an Srbik, Graz 26. Mai 1933, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 392; Brief von Srbik an Werner Näf, Wien 9. April 1934, in: Ebenda, S. 397.
- 17) Brief von Srbik an Oswald Redlich, Wien 6. Juli 1936, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 458 f.
- 18) Brief von Wilhelm Schüßler an Srbik, Potsdam 13. März 1938, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 495 f.
- 19) Brief von Srbik an Werner Näf, Wien 12. April 1938, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 487.
- 20) Helmut Reinalter, Heinrich Ritter von Srbik, in: Wehler (Hrsg.), Deutsche Historiker, Bd. 8, 1982, S. 78; Fritz Fellner/Doris A. Corradini, Österreichische Geschichtswissenschaft im 20. Jahrhundert. Ein biographisch-bibliographisches Lexikon, Wien/Köln/Weimar: Böhlau, 2006, S. 386; Karen Schönwälder, Heinrich von Srbik. „Gesamtdeutscher“ Historiker und „Vertrauensmann“ des nationalsozialistischen Deutschland, in: Doris Kaufmann (Hrsg.), Geschichte der Kaiser-Wilhelm-Gesellschaft im Nationalsozialismus. Bestandaufnahme und Perspektive der Forschung, Bd. 2, Göttingen: Wallstein, 2000, S. 528–530.
- 21) H. R. v. Srbik, Die Deutsche Wissenschaft und die Wiener Akademie im Großdeutschen Reich, München: F. Bruckmann, 1939.
- 22) Brief von H. R. v. Srbik an Karl Brandi, Ehrwald 10. August 1938, in: Die wissenschaftliche Korrespondenz, S. 495 f.
- 23) H. R. v. Srbik, Deutsche Einheit. Idee und Wirklichkeit vom Heiligen Reich bis Königsgrätz. Bd. IV, München: Bruckmann, 1942, S. 482 f.; Helmut Reinalter, Heinrich Ritter von Srbik, S. 82.
- 24) Wandruszka, Einführung, S. XVIII.
- 25) H. R. v. Srbik, Geist und Geschichte vom deutschen Humanismus bis zur Gegenwart, 2 Bde., München/Salzburg: F. Bruckmann/Otto Müller, 1950/51.
- 26) Srbik, Deutsche Einheit I, 2. Aufl., München: Bruckmann, 1936, S. 15–91; Österreich, S. 47.
- 27) Österreich, S. 29 f., 35.

- 28) Österreich, S. 35–48.
- 29) Deutsche Einheit I, S. 92–163; Österreich, S. 45, 48–50.
- 30) Deutsche Einheit I, S. 163–165; Österreich, S. 51–53.
- 31) Deutsche Einheit I, S. 166–183, 196–200, 220f.
- 32) Österreich, S. 58 f.
- 33) Deutsche Einheit I, S. 183–298; Österreich, S. 57–59.
- 34) Deutsche Einheit I, S. 299–456.
- 35) Srbik, Deutsche Einheit II, 2. Aufl., München: Bruckmann, 1936, S. 9–142;
Österreich, S. 57 f.
- 36) Deutsche Einheit II, S. 145–165.
- 37) Deutsche Einheit II, S. 166–203.
- 38) Deutsche Einheit II, S. 204–411.
- 39) Srbik, Deutsche Einheit III, München: Bruckmann, 1942, S. 3–25.
- 40) Deutsche Einheit III, S. 26–166.
- 41) Deutsche Einheit III, S. 167–262.
- 42) Deutsche Einheit III, S. 263–399.
- 43) Deutsche Einheit III, S. 400–497.
- 44) Deutsche Einheit IV, S. 424, 428, usw.
- 45) Geist und Geschichte I, S. 355–400.
- 46) Geist und Geschichte II, S. 1–73.
- 47) Geist und Geschichte II, S. 75–80.
- 48) Geist und Geschichte II, S. 80–121; Österreich, S. 76 f.
- 49) Geist und Geschichte II, S. 337–380.
- 50) Reinalter, Heinrich Ritter von Srbik, S. 78.
- 51) Österreich, S. 51 f.
- 52) Schönwälder, Heinrich von Srbik, S. 536.
- 53) Schönwälder, Heinrich von Srbik, S. 538.
- 54) Schönwälder, Heinrich von Srbik, S. 539.